奴隷になった幼馴染のヤンデレお嬢様でした

おさなじみ

私を買い取ったのは

著者 mkiバーガー
原案 エルトリア
イラスト Dermar
タケシス

SEIKA 聖華文庫

ノルン・フィーゼル

ニーナ・キャベンディッシュ

第一話　買い取り先は幼馴染

「……ハイ、ありがとうございまス～！　買い上げいただいた『商品』は後ほど購入者様の元へとお届けにあがりまス。さて、当オークションもそろそろ終盤！　張り切って参りましょウ！！」

布越しに聞こえる呂律の怪しいアナウンスによって、暗闇の中を彷徨っていた私の意識が引き上げられた。およそ2メートル四方の箱に覆い被せられた厚布は外部から中身を隠すための代物であり、当然こちらからも外の様子は窺えない。それでも、漂ってくる不快な臭気だけでここが碌でもない場所である事は容易に察しがついた。

（……っ、よりによって『商品』呼ばわりだなんて。今更取り繕うこともないでしょうに）

おそらく薬か何かを盛られたのだろう。朧げな記憶の中で自分を取り囲む男たちが口にしていたものと同じ単語が聞こえてきて、二十年の人生の中で最も杜撰な扱いに文句の一つでも言いたくなるけれど、口を突いて出るのはくぐもった唸り声だけ。こじ開けられた口内に残る球に開けられた幾つもの穴からひゅーひゅーと掠れた音が鳴り、舌の上でゴム特有の奇妙な味が広がる。開きっぱなしの口端からだらだらと涎が溢れるのを止めようにも、頭上から伸びる手錠に繋がれた両腕は一向に下ろせない。

幕の向こうでは続々と値段の応酬が繰り広げられている。数万、十数万と跳ね上がっていく額を耳にしても、ほんの数日前までなら眉一つ動かさなかったかもしれない。しかし今は文字通りの無一文……今身につけている物だって、胸元と腰回りを申し訳程度に隠せるほどの面積しかない、服と呼ぶにはあまりにも粗末なボロ切れでしかないのだから。

『さあ、次が今回のオークションの目玉にして今をときめく最高級のお宝……"あの"フィーゼル家のご令嬢、ノルン・フィーゼル様でございまス！！』

「ふ？　――――――ッ！？！？」

物思いに耽っていた時間は思いのほか長かったらしい。少々不意打ち気味に名前を呼ばれて顔を上げた瞬間、引き下ろされた幕の向こうからの光に思わず顔を背けてしまう。しかしそれも一瞬のことで、眩さに慣れた瞼を上げた私の目に飛び込んできたのは――――半円状のホールに腰掛ける大量の人間と、その顔面に張り付く巨大な蝶だった。

「……ッ！？　～～～～～～～！！！？！？」

『ご覧のように未来のご主人様たちに会えて大変喜んでおりまス！　なんと言ってもフィーゼル家といえば新聞の一面を飾った没落事件。際限なく続くと思われた事業の拡大に失敗し、敢えなくお家取り潰しとなったあの元・名門貴族の一人娘が！　父親の抱え込んだ莫大な負債を少しでも埋めようと文字通りその身を捧げているのでス！！　……アァッ！　なんとも涙ぐましいではないですカ！」

わざとらしい演技と口調に司会の男を睨みつけるが、そんな些細な抵抗など全く気付く様子もない。それよりも目についたのは、彼の背後に並べられた空っぽの檻だ。大人一人が余裕で入るほどの大きさのそれの天井からは半ばで切られた縄がぶら下がっていて、もしかしなくても今自分が入れられているのと同じ類の物だと分かる。そしてその中身がどうなったのかも、現在進行形で浴びせられる下卑た視線が物語っていた。

――おい、アレ本物かよ。

――間違いない、社交場で見たことがある。例の"姫様"だぜ。

――アイツの家のせいでウチは大損食らったんだ！何としてでも手に入れて、たっぷりお礼をさせてもらわないとな……

塞ぐもののない耳に届く呟き。その内容と身なりを見る限り、ここに居るのは全員それなりの地位と権威を持つ者ばかりなのだろう。落ち着いた頭でもう一度目を向ければ、顔に張り付いているのは蝶などではなく素性を隠すための仮面だと分かった。

おそらく父の事業に巻き込まれたどこぞの貴族のお偉方なのだろうけれど、それを娘の私に八つ当たりした所でどうにもならないと何故理解できないのか。いつもならそう切り捨てるのだけれど、今の自分がそう出来る立場にない事も、それを実行できるほどの余力が無いこともイヤというほど痛感させられている。つい先日まで当たり前に機能していた"皇国有数の貴族と謳われたフィーゼル家の一人娘"という肩書きはこの場において何の意

味も無く、身内の借金の方に売り飛ばされた一人の『奴隷』でしかないのだから。

「さぁ皆様、泣いても笑ってもこれが本日最後の『商品』ですヨ！　愛玩用に側に置くのも良し、従者としてこき使うも良し、勿論“お楽しみ”の相手に使うのも良し！　別にコレの所有者になったからと言って借金の片棒を背負い込む心配は要りませんので、どうぞ日頃の緊張とお財布の紐を緩めていただきますようお願い申し上げまス！」

オークションの開始を告げる木槌の音。途端に耳を塞ぎたくなるような喧騒がホールに充満し、続々と値段が釣り上がっていく。狂気に取り憑かれたような怒声にも似た声が反響し、舞踏会でも度々向けられていた値踏みするような目線がさらに遠慮のない下品さを以て絡みついてくる。目を逸らしても、顔を背けても、自分を見下す瞳、瞳、瞳……鳥籠に捕らえられた哀れな見せ物として微かに身体を揺することしか出来ない私を余所に、会場を包む熱気はさらに勢いを増していた。

「……サァ、現在の値段は６５万に届く所でしょうカ。奴隷――失礼しました、ウチで扱う『商品』としては新記録の額となるでしょウ！　これ以上名乗りを上げるお客様がいらっしゃらないようであれば、コレで落札とさせていただきますがよろしいですカ？」

司会の声が聞こえる程度には喧騒が止み、唸り声、或いは溜息のような音があちこちから聴こえてくる。当然といえば当然だろう。たかが奴隷一人……しかも家事や力仕事に無

縁な人生を送ってきた箱入り娘に掛けられる値はとうに超えている。労働力目当てで無いのなら、残された道の先にあるのは"肉体的な死"か"社会的な死"か――――

――――ザワッ……

（……？）

数秒後に訪れるであろう絶望的な未来に思いを巡らせていた私は、いつの間にか会場内の空気が変わっていることにすぐに気付けなかった。再び巻き起こった喧騒にはそれまでにない困惑の色が滲んでおり、呆気に取られていた司会が汗を拭きながらアナウンスを再開した。

「出ましタ～！！　ひゃ、百万！　百万でス！！　これに上乗せする方はおいででしょうカ！？」

「ひゃふっ……！？」

猿轡をかまされているのを忘れて思わず聞き返してしまった。文字通り桁違いの額を提示した人物に全員の視線が注目するが、ステージ上からは逆光にあたる位置にいるためか顔までは伺えない。それでも、その人物に挑む者がいないことは、先程以上の静寂に包まれた場内の雰囲気が雄弁に物語っていた。

「それでは、こちらの『商品』のお取引はこれにて締め切らせていただきまス！　購入されたお客様におかれましては、ステージ上にお上がりくださいませ！　他のお客様も、また次回お会いいたしましょウ～！」

購入を断念した富豪たちがスタッフの案内のもと続々と退出する中、こちらに歩いてくる人影が一つ。この辺りでは珍しい東洋風のドレスに身を包んだ人物の顔には蒼色の猫をあしらった仮面が貼り付いていて、じっとこちらを見つめてくる。

大枚をはたいてまで購入を決めたのはどんな奇特な人物かと睨み返したところで、キュッと結ばれていた謎の人物の口端が持ち上がった。

「……良かったぁ。やっぱり本物のノルンちゃんだぁ」

そう呟いた女性が顔を覆っていた仮面を外した。他の客が既に退出しているとはいえ、このような場で素顔を晒すなんて愚の骨頂というほかない。それでも、それを指摘するにはあまりにも見覚えのある顔、そして聞き覚えのある声に、私は呆然とその名を呟いた。

「……ニー、ナ……？」

S

初めて出会ったのは十数年前。父がまだ新たな権益の獲得に着手し始めた頃、同じ事業に携わる新興貴族との顔合わせの時だった。

「ノルンちゃん、すごいねぇ。ニーナの知らないこと、なんでも教えてくれるんだもん～」

キャベンディッシュ家、と言う名に聞き覚えはなかったけれど、東洋諸国との貿易で名を上げた一族が金で爵位を買い取ったのだと聞かされて大いに納得した。髪色からしておそらく父親の血が濃いのだろう、やや癖のある黒髪を肩口で揺らす少女――ニーナが緊張感のカケラもない顔で微笑みかけてくる。

悩みなど縁もゆかりも無さそうなのほほんとした口調に、幼子みたいに締まりのない笑顔。文字通りのんびりと育ってきたことが一目見て分かるその姿は自分の中の『貴族』のイメージとあまりにもかけ離れていて、思わず頭を抱えてしまう。

「あなたが何も知らなさすぎるんでしょ……。いいこと？　あなたみたいな成り上がりでも貴族であることは変わらないの。力ある者としての誇りをもって、弱い者を導くのが高貴な者の責務――それなのに、最低限の知識さえ持ち合わせていないなんて、同じ貴族として恥ずかしいわ」

「コウ……セキム……ノルンちゃん、むずかしい言葉もたくさん知ってるんだねえ」

物心ついた時から教え込まれてきた理念もまるで通じないことに頭痛が酷くなる。これが庶民相手ならここまで相手にすることはないけれど、成り上がりとはいえ相手も貴族、立場が同じであるならば無下に扱うわけにもいかない。

……あるいは同じ立場だからこそ、代々皇国を支えてきたフィーゼル家の者として恥じぬよう様々な教育を受けていた私にとって、彼女の態度は怠惰としか思えなかった。

それからというもの、幾度も顔を合わせるたびにあれこれと付いて回ってくる彼女と共に過ごすことが多くなった。こちらの機嫌を伺い、どうにかして懐に入ろうとする輩に隙を見せないよう壁を作っていた私にとって、気が付けば傍にいるのに人畜無害なニーナとの関係は何ともむず痒く、しかし決して不快なものではなかった。

『違うわ。ティーカップは取っ手を抓んで……その両手持ち、絶対外でやっちゃダメよ』

『この茶葉を使ってどうしてこんな渋い紅茶ができるの？　やり方は教えたんだから、もう一度淹れ直してきなさい』

『今日は勉強しないといけないって昨日伝えてたわよね？　……ああもう、分かったわよ！　その代わり、アタシの手伝いをすること！　手始めに、この紙に書いてある題名の本を探してきなさい。後ろの本棚のどこかにはあるはずだから……ほら、さっさとなさい！』

周囲の大人は妹が出来たようだと言っていたようだけど、どちらかというと主に構ってもらおうと寄ってくるワンコとか、三歩後ろを歩く家来とかの方が近かったのだと思う。何でも素直に言うことを聞くし、多少無茶なお願いでも『貴族としての嗜みだから』と言いくるめれば疑いもせず実行するのが楽しくて、結局父の計画が次の段階に進むまでは毎日のように顔を合わせていた。それからは私に課せられる勉強や稽古の量がさらに増してきて、徐々に疎遠になってしまったのだけれど……

§

「良かったぁ……他の人に買われてたりしたらどうしようかと思ってたよぉ」

オークション会場から場所を移し、引き渡し用と思しき殺風景な個室に運ばれた私を出迎えた女性。記憶の中の姿よりも色々と成長しているのは当然といえば当然なのだけれど、クセの強い黒髪やのんびりした喋り方はまるで変わっていない。

もっとも、長年疎遠になっていた昔馴染みとの思いがけない再会を喜ぶにはあまりにも状況が特殊すぎて、変わらず檻に繋がれたままの私は呆然とその顔を見つめ返すことしか出来なかった。その反応が予想外だったのか、檻を隔てた向こうに腰掛ける彼女――ニーナの表情が次第に曇っていく。

「……あれ～？　ノルンちゃん、ニーナのこと忘れちゃった？　そりゃあ、ずーっと会えてなかったけど……」
「――あ、いや、こんな所で会うなんて思ってもみなかったからビックリし……って　そうじゃなくて！　どうして貴女がここに居るの！？　しかもあんな大金まで……！」

マイペースで、ボーッとしていて、放っておいたら悪い大人に騙されても気付かなさそうな子だった。そんな彼女と奴隷市場という場所が結びつかなくて、混乱はさらに深まるばかり。そんなこちらの心情も露知らず、当の本人はほっと胸を撫で下ろしながらこちらに歩み寄ってくる。

「どうして、って……ノルンちゃんを助けにきたんだよぅ」

紅の瞳を潤ませながらそう口にした彼女の声に篭っていた熱。昔のままの朗らかな笑みを浮かべてさも当然のように語られた言葉の衝撃が強すぎて、そこに込められた真意には思い至らなかった。

「あのね、ノルンちゃんのお家のことを知らせてくれたのはお父さんなの～。でもお屋敷の人たちだけじゃなくてノルンちゃんもどこかに連れていかれたって聞いたから、いてもたってもいられなくって……色々調べてもらったらここに居るって分かったから、無理言

って入らせてもらったんだぁ。ちょっとだけ怖かったけど、大好きなノルンちゃんが遠いところに行っちゃうことに比べたら、平気へっちゃらだったよぉ」

えっへん、とたわわに実った胸を張ってみせるニーナの姿に、先程とは違う意味で言葉が出なかった。何年も前にろくな別れの言葉を交わすこともなく関係が消えてしまったと思っていた幼馴染が、私を助けるためにこんな所までやって来てくれた。驚きと安堵、それ以上の感謝の念で頭がいっぱいになって、無意識の内に張り詰めていた緊張の糸がプツリと切れた音がした。思わず涙がこぼれてしまうが、縛られたままの両腕ではそれを拭うこともできない。

「泣かないで、ノルンちゃん。待ってて、檻の鍵は商人さんが――――」

「……いやァ、お待たせして申し訳ありませン！　ご注文の品がご用意できましたのデ、最後の仕上げをさせていただきまス！」

「――はぁい、ありがとう～。ノルンちゃん、もうすぐ出してもらえるから、そのままジッとしててねぇ」

背後から聞こえる陽気な声の持ち主はおそらく司会を務めていた奴隷商だろう。数秒の格闘の末にようやく鍵を開けた彼の手が拘束の結び目を解いていくのを見て、ようやくこの地獄のような場所から解放されるのだという実感が湧いてくる。

「あ、ねぇノルンちゃん。ちょっとこっち見てくれる〜？」
「？　……どうかし――――」

――カチリ――――

微かな、しかしはっきりと聴こえた異音。檻の外からこちらを呼ぶニーナの方へ顔を向けた瞬間、ナニカが背後から右脚に押し付けられた。そのことに驚く間も無く、完全に拘束から解放された両腕が重力に従って垂れ下がり、引っ張られるように床にへたり込んでしまう。

「基本的な設定は先ほど説明した通りでス。ただ、装着個体にもよりますが馴染むまでにはいくらか時間が掛かるかト……」
「ありがとうございますぅ。でも、せっかく時間が掛かるならもう少し楽しませてもらいたいですねぇ。何処か別のお部屋……ベッドがあるお部屋とかお借りできますかぁ？」

頭上で行われるやりとりにも何の反応も示せない。顔を上げようにも、手足に力を込めようにも、そう命じた思考が瞬く間に解けてしまうような感覚。そんな最中に自分りながら、呼吸はいつも通り緩やかに行われている事が事態の異常性を如実に表していた。

（……なに、これ……何で、動けないの……）

「――――お待たせぇ、ノルンちゃん。お屋敷に帰る前に奥の部屋で休憩させてもらえるみたいだから、少しだけゆっくりしていこ～。じゃあ早速、【私の後ろに付いてきて】ねぇ」

投げかけられたその言葉。それが脳裏に届いたと認識した頃には、いつの間にか私の体はその場に立ち上がっていた。傍らを通り抜けるニーナに引き寄せられるように動いた足がふらふらと歩き出し、恭しく頭を下げる奴隷商を横目に檻を出た私はそのまま彼女の背を追っていく。自分の意思などまるで介在しない、まるで体の関節についた糸が操り人形のように無理矢理体を動かすかのような不思議な感覚。立て続けに起こる変化を捌き切れずにいる私が案内されたのは、一人分のベッドが備え付けられたスタッフの休憩用と思しき部屋だった。

「……なに……？　何なの、これ……？」

「大丈夫大丈夫～、ちょっとしたテストだよぉ。ここなら誰にも邪魔されないから……とりあえず【キスしよっか】ぁ♪」

邪魔が入らないようしっかり施錠したニーナは、思わず見惚れるほど滑らかな動きで身を寄せるとそのままこちらの返事を待つことなく唇を重ねた。

突然の事に身を固くする私を逃すまいと、背中に回された腕が優しく締めつけてくる。文字通り眼前に迫った紅の瞳が悪戯っぽく細められて、唇から伝わる熱が思考を灼いていく。

しかし、いつまでも動揺しているわけにはいかない。いくら幼馴染相手とはいえ過剰が過ぎるスキンシップを注意すべく、一旦身を離すために肩口に両腕を添え――

「……ン……ちゅ、ぢゅる……ちゅうぅぅ……っ」

――そのまま背面に滑らせた両腕で彼女を抱き寄せ、より深い口づけを落としていた。直前までの意思とは真逆の行為を実行してしまっている事は認識できていても、頭の中は『キスをしなければならない』という考えで埋め尽くされてどうにもならなかった。

「――ふ、んっ……ノル、ンちゃん……もっ……と……んぶぅっ！」

唾液と吐息を交換し合う隙間を縫って告げられた声が脳裏に絡みつき、接吻の激しさが更に跳ね上がる。何かに取り憑かれたかのように無心で求め合った私たちがようやく解放された頃には、二人とも息絶え絶えといった様子だった。

「……はっ……はぁ……！　ノルンちゃん……ノルンちゃんとのキス……ホントに出来ちゃった……えへへ、なんだか夢みたいだよぅ……」
「……ぁ……ハァ……ハァ……けほ、ケホッ……！」

うっとりとした顔で佇むニーナと裏腹に、私はまだ咳き込む事しかできない。今しがたの行為が現実である事は、口の中に残るニーナの舌と唇からもたらされた柑橘系の香りが示している通りだ。問題は、先程から言うことを聞かなくなる自分の体の方で――――――

「……何、これ……」

――――たまたま目に入った姿見に映る自分の姿に、今日何度目かの疑問が口を突いて出る。しかし今回のソレは今までとは違い、目の前の光景を受け入れたくないという願望が多分に含まれた呟きだった。

檻から出される直前に聴こえた異音の出所……己の右脚に取り付けられた金色の輪。剥き出しになった太腿に食い込むように取り付けられ、照明を反射して妖しく光るソレの正体が単なるアクセサリーでない事を、私はこれまでの人生の中で教え込まれてきた。

「……『服従の輪』……何でこんなのが私に……！？」

『服従の輪』。奴隷として生きることしか許されない者がその証として身に付ける事を強いられる魔道具の一種。一度主従登録が完了すると、奴隷は主の命令に絶対に逆らえなくなり、危害を加える事もできなくなる。それを付けた者が貴族の事業での労働の一部を担っている事は度々教えられていた。

それを今、他でもない自分が身に付けている。息を荒げていたことも忘れて硬直する私の背に柔らかいものが押し当てられ、耳元で熱い吐息と共に艶やかな声が紡がれる。

「――――？　どうしてって言われても……奴隷を買ったんだから服従の輪を付けるのは当然だよねぇ？」

私を買い取った『主』が鏡越しにこちらを見つめながら、両腕を回して胸を揉みしだいてくる。何を当たり前のことをとでも言いたげな顔の彼女に何か言い返そうとしたけれど、『【とりあえず静かにして】、【ベッドに大の字になって】ねぇ』と命じられた時点で容易く身体の主導権が奪われてしまった。

導かれるようにベッドに歩み寄った私が仰向けに倒れ込むと、隙だらけの私の身体に覆い被さったニーナが再び唇を重ねてくる。しかしそれは一瞬のことで、すぐに狙いが唇から頬、首元へと移動していき、キスマークを付けられるよりも身体中を這う舌先からの刺

激の方に敏感に反応させられてしまう。

「……ふぅ〜〜……♡　ん、っ……ゃ、ぁ……♡」

今のニーナの顔は私の脇に埋められており、よほどそこが気に入ったのか、緊張と快感に滲む汗を味わおうとするかのように執拗に舐め回してくる。手持ち無沙汰な腕は胸元に回され、双丘を覆うボロ切れの内側に忍び込ませた指で柔らかさを堪能すべく一心不乱に揉みしだく。

そこかしこからもたらされる快楽にも声が漏れないように唇を固く結び、それでも出てしまう音は最低限のボリュームに留める。しかしそれが出来ているのも彼女からの【静かにする】という命令があってのものであり、根本的に快楽を跳ね除けられているわけではなかった。

「……っ……ッ、ッッ！……〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡♡」

それまで膨らみに指を沈ませているだけだった指が胸元の頂点に位置する突起に狙いを定め、爪先でピンッと弾いた。こちらを包み込むような愛撫から一転してもたらされた強烈な刺激に心の準備ができていなかった私の身体に絶頂電流が駆け巡り、堪え切れなかった声がか細く響き渡る。そのきっかけを作った張本人が目の前の反応を見逃すはずもなく、

顔を上げたニーナは口端を妖しく持ち上げながらこちらを覗き込んできた。

「……」

イッたばかりの私の顔を満足げに見下ろしたニーナは、何を言うでもなくその身を離していく。今度は何をされるのかと動けない身体で身構える私だったが、そんなささやかな決意は下半身から突き上げられた一撃によって容易に打ち砕かれてしまった。

「……ちゅぅ……ちゅる、ちゅぷ……ノルンちゃんのアソコ、とってもツルツルで綺麗なんだけど、お汁がちょっぴり溢れてきちゃってるねぇ……勿体無いから、ニーナが全部舐めてあげる……じゅるるるぅっ！」

その目に映るのは見慣れない天井だけ。その光景が、度々視界を覆う閃光によって寸断されていく。家族や友人は勿論、使用人にさえ見せたことのない禁断の場所……数少ないコンプレックスである毛の薄い秘所を舌で好き放題に嬲られる。それが俗に『クンニ』と呼ばれる行為であることは街の本屋からこっそり仕入れた官能小説から知識として知ってはいたが、実際に経験するのは当然これが初めてだった。普段触れられることのない場所を這い回る軟体の感触に悶える私を逃すまいと、より深く顔を埋めたニーナの舌愛撫が襲いかかってくる。陰唇に吹きかけられる吐息さえ官能を高めるスイッチにしかならなくて、未知の快感に悶える私は自分の口が酸素を求めてパクパクと力なく開閉している事にも、

股間から唇を離したニーナが淫靡な笑みを浮かべている事にも気付けなかった。

「ちゅぅ……えへぇ♡　ニーナ、もっと欲しくなっちゃった……。　だからぁ――――【思いっきりイッて】♪」

ドロドロに蕩けた思考に溶け込む、淫蕩にまみれた『おねだり』。それは服従の輪を通して絶対的な『命令』となり、ノルン・フィーゼルという人間の中での絶体的な『常識』に変換される。その最後の一押しとなったのは、仕込みを終えたニーナが舌先で陰核を押しつぶすといういささか乱暴な一撃だった。

――――ゾクンッ……！！！

その瞬間、世界からあらゆる要素が掻き消えた。色も、匂いも、音も――――全てのものが白く染め上げられた空間に放り込まれたような感覚が全身を包み込み、処理しきれない情報の濁流に意識ごと押し流されてしまう。

「――――――――――――――――――――！～～～～～～～ッ♡～～～～～～～～～～！？！？！？♡♡♡♡♡「

最初に戻ってきたのは聴覚。決して広いとはいえない空間にこだまする甲高い嬌声が自

分の喉から零れ出たものだと理解したのは、それから数秒遅れての事だった。

ガクッ！　ガクンッ！　と腰が波打ち、生温かな湿り気と脱力感に見舞われた。室内に充満する性臭の源泉であるそこから噴き出す潮が、押し付けられる口内に注がれていく。勢いに耐え切れずえづいているのが音として伝わってくるけれど、絶頂を強制された身体は放出されるはずの快楽を何度でも味合わせてきて、その度に浮かせた腰から勢いよく温水を溢れさせてしまう。

「――――ェ――――――――――あ――――――――――ァあ――――――――――」

絶頂と覚醒を何度繰り返したかもわからなくなってきた頃、先に白旗を上げたのは私の精神の方だった。もはや当初ほどの勢いもなく、入り口を緩ませた股間を細かく上下させるだけの装置となった下半身を見せつけながら意識を手放しかけた私の視界に滑り込んでくる少女の顔。

私の放出した愛液を口だけでなく顔全体で受け止め、艶かしくコーティングされたニーナの唇が言葉を紡ぐ。

――これから仲良くしようね、ノルンちゃん。

淫熱に浮かされた邪な笑みを浮かべた彼女の顔が、輪郭ごと徐々に薄れていく。意識を途切れさせる直前まで記憶の中にこびり付いていたのは、弓形に曲げられた瞳から覗く妖しげな紅の輝きだった。

第二話　性奴隷となった私

朝日に照らされた街並みを映す窓のそばを通り抜けながら、あまり見覚えのない東洋風の装飾が混じった廊下を進んでいく。キャベンディッシュ家の領地は各所との貿易の拠点として有名だと耳にしていたものの、その中心に立つ屋敷からは朝早くから忙しそうに荷を運ぶ人々の姿や掛け声がよく分かって、その噂が本当なのだと実感させられる。

もっとも、今の私にその光景をゆっくり眺めていられる余裕なんてないのだけれど。

「……っ……やっと着いた……。ほんとにここ、よね……？」

手元の鍵に刻まれたものと同じ紋様が描かれた扉の前で、無意識の内に安堵の声が漏れる。歩いた距離だけなら大したことはないはずなのにこれほどまでに疲労感が蓄積しているのを自覚しながら、その要因である自分の格好に改めて目を向けた。

昨日まで身に付けさせられていたボロ布とは比べ物にならない肌触りの良い素材。素人目にも高級な代物だと分かるソレはほんの少し窮屈で、背中に結ばれた紐によって素肌に押し付けられた薄布からは紅く色付いた谷間が覗いている。ボディラインどころか丸みを帯びた胸の先端で存在を主張する突起まで丸見えになってしまっていることに気付いていながらも、両腕は下半身の前後を隠すので精一杯だ。

（〜〜〜〜っ、なんでこんな服しかないのよ！？　こんなのほとんど裸と変わらないじゃない！）

こみ上げる羞恥心に唇を噛みながら鍵と一緒に持った紙片を握りしめ、数分前の自分の軽率な行動を悔やんだ。

見慣れない部屋で目を覚ました私がすぐに見つけられるよう枕元に置かれていた一通の手紙。丁寧に折り畳まれたそれをめくってみれば、書いた人の人柄を表すかのような丸っこい字が並んでいる。そこには、気を失っている間にキャベンディッシュ家の屋敷に運ばれたこと、未だ世間の注目の的であるフィーゼル家の娘のノルンを外に出すわけにはいかないこと、屋敷に置くにせよ『顔と名前のよく似た使用人』として扱うよう父から言われたこと等が事細かに書かれていた。

［詳しい事は起きてから説明するから、朝になったら私を起こしてほしいな。服はタンスの中に入れておくから、忘れずに着替えてきてね。　ニーナ］

彼女の声が頭の中で再生されきった瞬間訪れた、脳内で何かが切り替わる感覚。為すべき【命令】を認識した身体が意識を置き去りにして、ベッドを抜け出し一直線にタンスへと向かう。初めて訪れた部屋なのにまるで何度も使ったことがあるかのようにスムーズな

動作で両開きの扉を開けた私の目に飛び込んできたのは、この屋敷の簡単な見取り図とニーナの部屋の鍵、そしてたった今身に付けている『衣装』だった。

（うぅ、スースーする。せめて下に何か履きたいのに……こんなの誰かに見られたりしたら……）

エプロンじみた服はかろうじて身体の前方を隠すだけで、少しでも風が吹けば股間は丸見え。そうでなくとも背中やお尻は完全に無防備で、ただ廊下を歩くだけでも足取りはおぼつかなくなっている。不安と緊張でじっとりと汗ばむ太腿には、使用人という肩書きが完全に建前であることを示すかのように服従の輪（どれいのしるし）が妖しく輝いていた。

そうこうしている間にも誰かがここを通るかもしれない。思考の海に沈みかけていた意識をかき集め、用意された鍵で部屋に入る。書きかけの書類や積み上げられた本、実験器具のようなものが並べられた室内で、目的の人物はベッドに丸まっていた。

「……えへへへぇ……ノルンちゃん……だぁいすきだよぉ……♪」

ご丁寧にこちらに顔を向け、心底幸せそうな表情で夢の世界の住人になっている黒髪の少女。締まりのない口元と蕩けそうな声音の寝言に毒気を抜かれながら、大人になっても変わらない幼馴染の肩を揺する。

「ニーナ、起きて頂戴。もう朝よ……って、布団にくるまらないの！　貴女が起こすように言ったんでしょう！？　もう……いいから早く起きな、さ……！？」

どうやら彼女は朝には弱いらしい。一瞬目を開けかけて再び布団に潜り直そうとした彼女から無理やり毛布を引き剥がし、そのまま私は目の前の光景に固まってしまった。

「……ん～、さむいよぉ。あとちょっとだけ寝た……ん……？　え……？　あれぇ？　ノルンちゃんだぁ。……そっかぁ、手紙読んでくれたんだねぇ」

まだ眠気の抜けない瞼を擦り、ニーナがようやく身を起こした。涎を垂らしたままの唇をふやけた笑みの形に持ち上げた彼女の顔から視線を下せば、傷一つない白い肌が視界いっぱいに広がる。支えるものがなくとも形を保ったままの膨らみは、重力に逆らうかのように先端を天へと向けている。中で暖まっていたからだろう、二の腕や肩、胸元がほのかに色づき、ふにゃりと垂れた目も相まって妖艶さが際立っている。

露出狂じみた自分の格好とは違う、完全な裸。不意打ち気味に現れた肌色の景色から急いで目を逸らし、どうにか気を取り直して仕事を再開した。

「そ、そうよ。わざわざこんな格好でここまで来させたんだから、早く起きて朝食を済ませてきなさい。それから、こんなふざけた格好じゃなくてちゃんとした服を」
「えへへ、朝からノルンちゃんの顔が見れて嬉しいなぁ。でも、朝食ならもう目の前にあるよ～」

瞬間、ガクンッと世界が揺らいだ。

彼女の発言に振り返る間も無く、視界が目まぐるしく切り替わる。何が起こったのか、何をされたのかも分からない。ただ、気がついた時には私の背には主人の温もりを残すベッドが押しつけられていて、布団代わりに覆い被さったニーナを見上げる形になっていた。

ようやく追いついた意識が悲鳴を上げかけるものの、先回りした唇によって蓋をされる。そのまま口内を蹂躙する舌と体の上を艶かしくなぞる手のひらの感触に身を捩らせるが、抵抗と呼ぶにはあまりに心許ない動作でしかなかった。

「……ニー……ナ……待っ、やめて……！　ふ、ふざけてないでしゃんとしなさいっ」

呼吸の合間を縫ってどうにか静止を求める。これでは何のために起こしにきたのか分からないと嗜めたつもりだったけれど、返ってきたのは心底不思議そうに首を傾げる幼馴染の顔だった。

「ふざけているのはノルンちゃんの方だよぉ。【ご主人様に対してその口の利き方はなにかなぁ？】」

ゾッとするほど平坦な声。それまでの幸せそうな雰囲気が嘘のように消え失せたその姿に、選択を誤ったことを痛感する。今の彼女はかつての幼馴染ではなく、奴隷わたしを金で買った主人なのだ。ようやくそのことを思い出した私に追い打ちをかけるように、右足に取り付けられた服従の輪が熱を帯びた。

「……申し訳ございませんでした、ニーナお嬢様。どうか、この身体を好きなだけご堪能ください」

「ん、よくできました～。それじゃあノルンちゃん、【口を開けて】」

唇から紡がれる流暢な台詞。それが自分の口から零れ出たものだと認識した頃には、身体は力無くベッドに投げ出されていた。内心でどれだけ抵抗を試みても、既に自分のものでなくなった身体はまるでいうことを聞かない。

求められるまま口を開けてニーナの舌を受け入れ、思う存分唾液を啜られる。喉を潤した彼女の舌が首筋をなぞり、胸元に張り付いた布を捲り上げた先に現れた乳首に狙いを定め、何度も何度もキスの雨を落とす。左右の胸から交互に伝わる感触に身を震わせ、時折訪れる鋭い刺激に肩を跳ねさせる。その反応を楽しんでいるのか、それまで触れては離れてを繰り返すだけだった唇が右の乳首に固定され、音が鳴るほど強く吸い上げられる。

「〜〜〜

この部屋に辿り着くまでに蓄えられた羞恥と度重なる愛撫(あいぶ)によって湿り気を増した秘部の入り口を指でなぞりながら、慈愛に満ちた口調で語りかけてくるニーナ。それに返事をすることも、彼女の表情を伺うことも出来ず、絶え間なく与えられる弱々しい刺激に思考が侵されていく。

そう、弱い。絶頂を迎えるには足りないのに、無視するには持て余す……そんな痺れが全身を駆け巡る。昨日のクンニで発覚した私の弱点(クリトリス)だけを念入りに避け、念入りに快楽が蓄積されていく。

「……ぇ、や、ひぁっ……ぁ……っ、あぁぁぁ……」

先程の乳首舐めよりもか細い声が唇から零れ、それに追従するように貯めこまれたものが吐き出されてく。決して激しくはない、しかし時間をかけた絶頂。本命を受け入れるより早く決壊した膣口から溢れる液体は、主人の寝床に広大な地図を描いていく。昨日の強引な責めによる潮吹きとは異なる、生理的な欲求に近い温水の噴出。意識を残したまま満たされた排泄欲求を痛感して、私の頭の中は羞恥と高揚感、背徳感でぐちゃぐちゃになっていた。

「あ〜ぁ、もうおしまいかぁ。それじゃあ続きはまた今度だねぇ。またすぐに戻ってくるから、【それまでは一人で楽しんでてねぇ】」

粗相を働いた使用人を叱るでもなく、股間から指を離したニーナがゆっくりと離れていく。そのまま自分で着替えて部屋を出ていく彼女の背を目で追いながら、先程の刺激を思い出すかのようにひとりでに動き出した指による愛撫に呑まれていった。

§

「ただいまぁ〜。意外と準備に時間がかかっちゃって……って、すっかりびしょ濡れになっちゃったねぇ」

扉が開く音と共に視界の外から降ってくる楽しげな声。こちらを見下ろす気配だけはどうにか感じ取れるものの、そちらに顔を向ける余裕も言葉を返す余力も無く、僅かに残る意識は生暖かな液体を溢れさせて止まらない蜜壺を休みなく掻き回す事だけに費やされていた。

「このまま見ていたいけど、お楽しみはこれからだもんね。というわけで、【もう手を止めていいよ】〜」

「……っ、ぁんッ……か、かしこまり、ました……ニーナお嬢様……ぃ……ンッッ！」

植え付けられた【命令】を忠実に実行し続けた指の拘束が、帰還した主人の許しを得てようやく解放された。最後の仕上げとばかりに押し潰された肉豆からもたらされる快感に跳ね上がった腰が力無く崩れ落ち、ふやけた入り口に突き立てられた二本の指によって塞がれていた大量の愛液が零れていく。

「……っ……はぁっ、ん……やっと……おわっ、た……ぁ……」

熱に浮かされたみたいに朦朧とする頭をどうにか動かして時計を見れば、ニーナが部屋を出てから一時間が経過しようとしていた。それだけの時間を休みなく自ら快楽を貪るために浪費してしまったという事実、それを遂行させられるだけの強制力を持つ服従の輪の効力に思わず背筋が凍る。一分前まで頼まなくても好き放題に動いていた腕や足には力が入らないのに、重点的に虐められた秘部だけが異様に熱くて……微かな空気の揺れでさえ察知できるほど敏感になってしまったソコに向きかけた意識を引き寄せたのは、額に押し当てられた指先の感触だった。

「ニーナね、ノルンちゃんに会えたら見せたかったものがあるんだぁ。ねぇ、一緒に来てくれる？」

円を描くように額をなぞり、こちらを見下ろす紅い瞳。あどけなさと妖艶さが混じった表情が間近に迫り、小さな唇から紡がれる声が鼓膜を震わせる。触れ合っている一点から

伝わる体温と共に染み込んでいく言葉が意識を蝕み、気がつけば私の身体はひとりでに頷いていた。